

野田秀樹『役者の寄り目』

十六歳の時、高校で役者の真似事をやり始めた。

ある日、芝居を見た友人に「野田は、芝居の終わり頃になると目が寄るね」と言われた。その友人は今、裁判官になっているので、それは嘘ではなかったと思いたい。その時は、私は「ふうん」と聞き流した。

やがて、私は一枚の絵の秘密に気付く。

写楽の役者絵である。誰もが一度は目にしたことのある、指が懐からでて曲がり、そしてその目は、確かに寄っている。あの絵だ。

この役者絵は、「演技をしている役者を誇張したもの」として紹介されていた。だが私は、「ああ、この絵は誇張ではない。リアリズムだ」と直感した。

そしてこの直感はずらに、名優白石加代子を見て裏付けられる。彼女は、その当時、舞台上で目が寄る狂気の女優として活躍していた。「寄り目」は彼女の専売特許だった。さらに歌舞伎には、いまだに団十郎の「睨み」というお家芸がある。「睨み」とは、すなわち「寄り目」である。察するに、初代団十郎が、偶然舞台上で集中していい芝居をしていた折に「寄り目」をしていたのに違いない。やがて、それが、ひとつの型になり、今では、その型から入り、その折の団十郎に近づくとという逆現象になっているのではないか。

確かにそういうことはある。

どうしても笑えない役者は、無理して嘘の笑いをするよりも、「腹筋をきざみに動かす」というその型から、笑いを獲得することができると。私があみ出した秘訣である。

役者の腹筋が、役者の笑いを導くように役者の寄り目は、役者の集中力、ひいては憑依を導く。(中略)

だが「憑依」は、外からやってくるのではない。自らの肉体の内からでてくる。その化けの皮を剥けば、ただの「集中力」なのだ。あけすけに言えば「寄り目」なのだ。

そして、役者は、どんなに「憑かれ」ていても、「寄り目」をしている自分を冷静に見ている目がある。たとえば、白石加代子という女優は、「寄り目」をして、観客を感動させながら、その日の晩ごはんを考えている。……かもしれない。

(野田秀樹の日記)『野田秀樹』役者の寄り目』日本経済新聞 平成十二年五月二十八日朝刊)